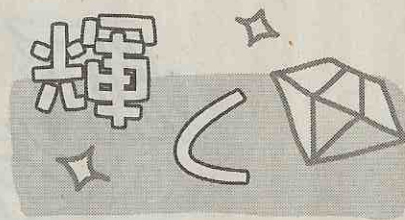




「調合した薬に満足してもらって、本当にうれしい」
と、古閑さゆりさん(熊本市)

誇らしい父の姿追って



「父が働く薬局は遊び場の一つだった。商品の袋詰めをよく手伝っていました。熊本市の太陽堂薬局並木坂店に勤める古閑さゆりさん(三十八)は、そう振り返る。いた光景だ。

薬 剤 師

古閑さゆりさん

「先生、あの薬のおかげで、元気になった」。客からお礼を言われる父。何だか誇りしかった。

教師を夢見たこともある。だが、父に感謝する客の満面の笑顔が、頭に焼きついてた。「私も人に喜ばれる薬剤師になりたい」と、熊本大薬学部に入學。

一九九二(平成四)年、国家試験に合格した。薬剤師になって、薬が万能ではないと分かったという。「薬は、病気を治す補助をするものでしかない。治す一番の方法は、生活習慣の改善。野菜が多めの食時、適度な運動、十分な睡眠が大事」と言い切る。

雑誌、テレビ、インターネットなどで情報が氾濫(はんらん)する時代。「絶

対治る」などとうたった健康商品に、消費者が気軽に飛び付くことを心配する。

「わらにもすがりたい気持ちにはわかる。ただ、体格や体質、症状の度合いで、合う、合わないがある。健康や薬の専門家に、相談してもらいたい」

「近くに来たからちよつと寄った」「痛みがひいた、ありがとう」「あなたが調合した薬じゃないと駄目なのよ」。お客さんから掛けられる一つの言葉がうれしい。

太陽堂薬局社長の父の下で、薬を調剤したり、顧客の相談に乗ったり、新商品を説明したり。かつての父のように、店内を忙しく駆け回っている。

(報道部・潮崎知博)